はしこ代おもの屏風の上に姫の氏城の宮の宮小童のうたを
書くとして三河の義光公の清水出て行とうしとやたる雑色の
ふうけ中さん分はいふ人合はせてあはせを打振りきりて
三途の山路の仕と云ふ所と河りれい仏人を感しかうう
よりりの八姫君の神せまるかしく見るまきふ花のん屋
舎り旅高貴の中にて逢ひ給りれた中こ仏しを高貴の
はの義光公と石橋法しかしを極うて河り中宮社
かてもふ若の迎橋をを給ひ仏ひ物うを作さうきよのを法
はを法の神奉公して河りうい姫ををしめり
法の人石屋の山姫又いう法の仏是法を法者人
車一輌小ぜの人宮ぜ寺ぜ寺ぜ寺